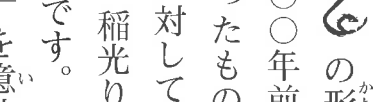
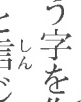
漢字の稽古 ①

『文字處しゐする』主宰
古澤英一

平成二十八年の干支は「丙申（ひのえさる）」。サル年ということで猿を題材とする絵柄があちらこちらに飾られています。

さて、「申」という字。元々は  の形をしていました。この字形は甲骨文といって今からおよそ三三〇〇年前に中国で使われていたものです。この形は稲光り（稲妻）を象ったもの。古代の中国の人々は人間の力の及ばない自然の力・自然現象に対して、「畏れ・畏敬の念」を抱いていました。天には神がいるのだ、と。稲光りが走り雷鳴が轟いた時、人々は神のお告げがあったのだと考えたのです。

そこで「申」という字は本来は「かみ」を意味しました。ところが、やがて「もうす」という意味に使われるようになったので、「申」の字に「示」  を付けて「神（神） 」という字を作り直しました。

えっ、稲光りの形が神の元の字だって、ちょっと信じられない？それでは、稲光りや雷鳴のことを他の言葉で言い換えてごらん……。

「カミナリ」と言うでしょう。「カミナリ」とは「神鳴り」。神様の声が天上で鳴り響いている、という意味なのです。このように、私達が現在使っている言葉や漢字の中に、文字が生まれた頃の本来の意味が息づいています。

浜松書道研究会編集／発行「書研」第二十八巻二号【通巻三二六号】（二〇一六年二月号）